

クロスオーバー・キーボーディストの研究
CROSSOVER KEYBOARDIST

シリーズ VOL. ③
SERIES



Dave Grusin

デイブ・グルーシン・キーボード・テクニク

●林知行 著



INTERSONG



DAVE GRUSIN

クロスオーバー・キーボーディストの研究 ③

デイブ・グルーシン・キーボード・テクニック



Contents

デイブ・グルーシン / インタビュー	4
デイブ・グルーシンの作曲・演奏スタイルについて	8
本書で使用したレコード	12

	解説	曲
ラグ・バッグ <i>Rag-Bag</i>	13	15
シティ・ナイツ <i>City Nights</i>	21	24
ロンド…イフ・ユー・ホールド・アウト・ユア・ハンド <i>Rondo…If You Hold Out Your Hand</i>	29	32
マウンテン・ダンス <i>Mountain Dance</i>	39	41
サンクソング <i>Thanksong</i>	49	51
キャプテン・カリブ <i>Captain Caribé</i>	55	57
イーザー・ウェイ <i>Either Way</i>	63	66

3月19日、中野サンプラでのステージ終了後、「キーボード・マガジン」誌がグルーシンにインタビューした。彼が率いてきた“GRPオールスターズ”のこと、アルバム「マウンテン・ダンス」のことなど、リラックス・ムードの中で語ってくれた中から、「マウンテン・ダンス」の話題を中心に抜粋してみた。(——インタビューア：岩崎工——)

——今回はシンセサイザーなどのサウンドが多く聴かれますね。シンセのプレーヤーを2人も加えているようですが、その辺の意図は？

D.G. あのアルバムは、ほとんどライブなんだ。

——えっ？スタジオ・ライブということ？

D.G. そう。2トラックのデジタル・レコーダーを使ったんでね。あのネライは、ダイレクト・カットと似たようなことさ。

——それでかなりクリアな音質になっているのですね。

D.G. そうとも。あれはラリー(ローゼン)の仕事さ。でも、まあ一種のチャレンジではあったよ。今までのように、シンセを後からダビングすることも、やれば出来ただけだね。だから、知ってるかぎりでも最も有能なシンセシストを2人選んだんだ(イアン・アンダーウッドとエドワード・ウォルシュ)。彼らは実にその楽器を熟知していて、文句なしに良かった。

——A-④“Rondo”でスティール・ドラム風のシンセ音が出てきますね。あれはかなり作るのが難しい音色だと思うのですが、何というシンセを使ったのですか？

D.G. ミニ・ムーグだよ。

——貴方がオペレートしたのですか？

D.G. そう。リング・モジュレーターだと音程が取れなくなってしまいうからね。フィルターの発振を利用して作るんだ。ディケイの操作が決め手だね。

——とてもヒューメインな音色ですね。

D.G. 僕も気に入っているよ。

——次に、貴方のピアノ・スタイルについてなんですが、両手のコンビネーションによるリズム的なスタイルはいつ頃確立したのですか？

D.G. ちょっとわからないなあ。多分、多くのジャズ・プレーヤーの影響だと思うけどね。それにクラシックの初歩でも左右の手の独立性もやるからね。一既に誰の影響とも言えないし、いつからそうなったかも思い出せないな。新しい方法をトライしてはいるけどね。時には、手がいそがし過ぎると感じるよ(笑)。

——あなたのピアノには、リズム的にも貴方自身の個性を

感じるのですが……。リチャード・ティーなどとも違うし。
D.G. そう思うね。リチャードは僕の最も好きなプレーヤーだ。何度か一緒にプレイする機械があったけど、全く驚異的でね。彼のやり方も取入れようと思ったけど、実際には無理だったよ。

——貴方の場合、アレンジャーでもあるわけで、必要以上に音数を多くしないということもあるのでは？

D.G. そうかもしれないね。でも基本的には、ピアニストもドラマーと一緒に立つ場だね。強拍にどちらのスティックを用いるか、なんてのは変わるだろうしね。

——いずれにしても、リズムでクリエイトするというのは現代的ですね。

D.G. 確かにね。リズムのアレンジは、現代的なものの中では非常に重要だ。特に最近ね。

——ところで、作曲をする時は、何かの楽器を想定しますか？

D.G. イエス。常に何の楽器で演るのかを考えながら作曲する。ピアノを使って作曲するというのは、僕にとってはちょっと危険なんだ。というのは、僕はピアニストだから、ピアノ以外には使えないものを削ってしまう可能性があるのね。ピアノで良く響くものが、オーケストラでも同じとは限らないから、作曲の時はピアノを遠ざけている(笑)。

——すると、純粋に理論的なことを用いて曲を作ることが多いのですね。

D.G. そうさ。それから各楽器でチェックするんだ。その時はピアノも使うよ。

——アレンジについて貴方なりの意見を聞かせて下さい。

D.G. 僕はアレンジを習ったり教えたりしたことはないから、基本的なことは言えないけど……。やって見たアレンジをすぐ実際の音にしてみるのが良いと思う。なるべく早く。そうすれば、多くのことを瞬間にして学べると思う。やっぱり聴くことだね。

——「マウンテン・ダンス」を聴くと、実に現代アメリカのエッセンスを感じるのですが、同時にユートピア志向のようなものは意識していますか？

D.G. よくわからないな。アメリカ的だというのは当然だろうけどね。大体、映画の音楽などをやる時は、自分の志向は2の次だからね。オーケストレーションだってその曲次第だからね。曲には、それ自身の生命があるものさ。

——影響を受けたミュージシャンや作曲家をあげられますか？

D.G. そう、父親かな。クラシックのバイオリニストだったんだけど、今まで出会った中で最高のミュージシャンだと思ってるよ。彼からは、音楽を意識(知覚)する方法を学び取った。ジャズ的な影響は数えきれないけど、ピアノで言えば、アート・テイタム、ビル・エバンス、ハービー・ハンコック、チック・コリア、それにキース・ジャレット。彼は音楽に対する姿勢が好きだ。今のグループで言えば、ウェザー・リポートもね。ジョー(ザビヌル)は、色々な要素を身につけたスゴイやつさ。彼らのサウンドは現代を生きているよ。

(「キーボード・マガジン」より)







デイブ・グルーシンの 作曲・演奏スタイルについて

林 知行



●クロスオーバー・ミュージックの仕掛人

クロスオーバー・ミュージックは、スタジオ・ミュージシャンの音楽活動と密接な関係にあるわけだが、デイブ・グルーシンの場合には、作・編曲の仕事や、プロデュースなど、広範囲にわたって活躍し、仕事面でもクロスオーバーするミュージシャンということが出来るだろう。

リー・リトナー、アール・クルー、ノエル・ポインターなど、クロスオーバー界のスターを育てたり、映画音楽でも良い仕事を残しているが、最近では、「マイ・ディア・ライフ」にはじまり、「カリフォルニア・シャワー」、「モーニング・アイランド」と続く、渡辺貞夫との創作活動も耳目に新しいところだ。

最新アルバム『マウンテン・ダンス』は、彼の代表曲ともいべき「キャプテン・カリブ」をはじめとして、クロスオーバー・ミュージックのエッセンス溢れる曲や、美しいピアノ・ソロなど、ごきげんなアルバムとなっている。この「クロスオーバー・キーボーディストの研究シリーズ」の第3弾は、彼の作・編曲スタイルと演奏スタイルを徹底分析しようというわけだ。

●キーボーディストとしての実力を感じるアルバム『マウンテン・ダンス』

新作『マウンテン・ダンス』は、前作『ジェントル・サウンド』(ポリドールMPF-1145=廃盤)に比べると、彼のキーボードが前面に押し出され、その実力の程がいかに発揮されている。美しいアコースティック・ピアノやエフェクターを上品にかけたエレクトリック・ピアノ、効果的なソリーナ、そしてシンセサイザー、とくりひろげられるトータル・サウンドはこたえられない。

ソロの部分なども、うまく抑制のきいた興奮というか、いつのまにか引きこまれてしまう。モチーフの展開など、そのインプロヴィゼーションは見事という他ない。

全部通して聴きおえた感じでは、アコースティック・ピアノが印象に残った。そして、いくつかの舞曲風の曲やソロ・ピアノから受けた印象はといえば、クラシカルな美しさというかロマンチズムというか、フランス印象派のようなイメージも想起させられた。

ひところのはやり表現ではないが、「ジェントル」というか「やさしさ」というか、彼の音楽は、決して自分だけ目立つというのではなく(それでいてしっかり自分の主張



のようなものは印象づけられているのだが)、トータル・サウンドの説得力という感じなのだ

●そのトータル・サウンドは柔軟な創作活動から生まれている

彼は、映画音楽や、数多くのシンガーやプレイヤーのためのスタジオ・アレンジ、そしてショー・アレンジ(1956年のデビューはアンディ・ウィリアムスのピアノ&コンダクターとしてだった)というように、作・編曲家として活躍してきた人だ。

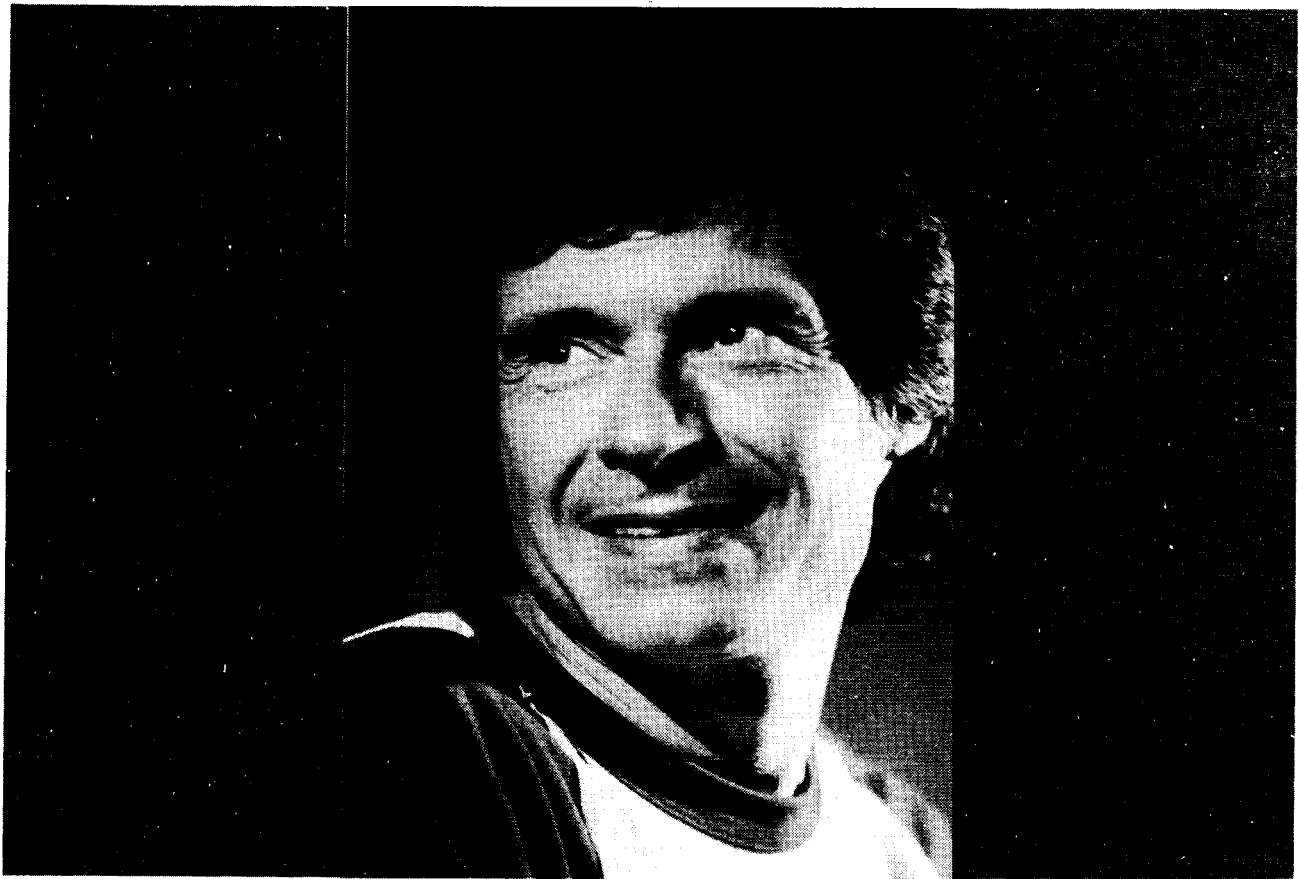
キーボード・マガジン('79年10月号)のインタビューの中で、彼は次のように答えている。——たとえばストリングスを使ってレコーディングをするときは、最終的にレコードにするときよりもレベルを上げるんだ。こうするとストリングスの音がとても良く聞こえるので、アーティストはもっといいプレイをしようと発奮するわけさ。ともかく僕は、アーティストができるだけいいプレイをできるように力を貸しているんだよ。——この他にも、トータル・サウンドの製作現場での彼のアイデアといえば、彼の蓄積(長いキャリアものをいっている)

から出たすばらしいものばかりだ。たとえば、このアルバムを聴いても感じたのだが、演奏しているパターンのほとんどは特別な譜面上の指示などなく、彼のプレイを中心として、メンバーの納得のもとに自由な展開を行っているようである。

キーボード・マガジン10月号のインタビュー記事の中で、彼自身もそのように答えているが、彼のまわりにいるミュージシャンとの相互作用というか、レコーディングの現場では、実に柔軟な創作活動が行なわれているということなのだ。シンフォニックなフル・スコアを書くこともできる作・編曲家であるグルーシンのこの姿勢こそが、現在のフュージョン・ミュージックなり、クロスオーバー・ミュージックの方法論そのものといえるのではないだろうか。

●グルーシンにみるクロスオーバー・ミュージックのエッセンス

この「クロスオーバー・キーボーディストの研究シリーズ」に並行して、リッターから「クロスオーバー・テクニカル・シリーズ」が出版されているが、その中に拙著「キ



ーボード・コード・ワーク」という本がある。いわゆる「クロスオーバー・ミュージック」におけるキーボードのエッセンスを抽出しようと試みた本なのだが、このデイブ・グルーシンの各曲の演奏解説を書き終えたところで、各項目ごとのテーマが、みごとに網羅されているのに気付いたところだ。

先にも述べたように、クロスオーバー界の仕掛人といった感じのデイブ・グルーシンのアルバムだから、クロスオーバー・ミュージックの特徴的なサウンドそのまま、いろいろなアイデア満載というのうなづけるところだ。詳しくは各曲の解説のところで、実際の譜面と対照させて読んでもらう方がよいと思うので、各項目のポイントをいくつか指摘しておこう。

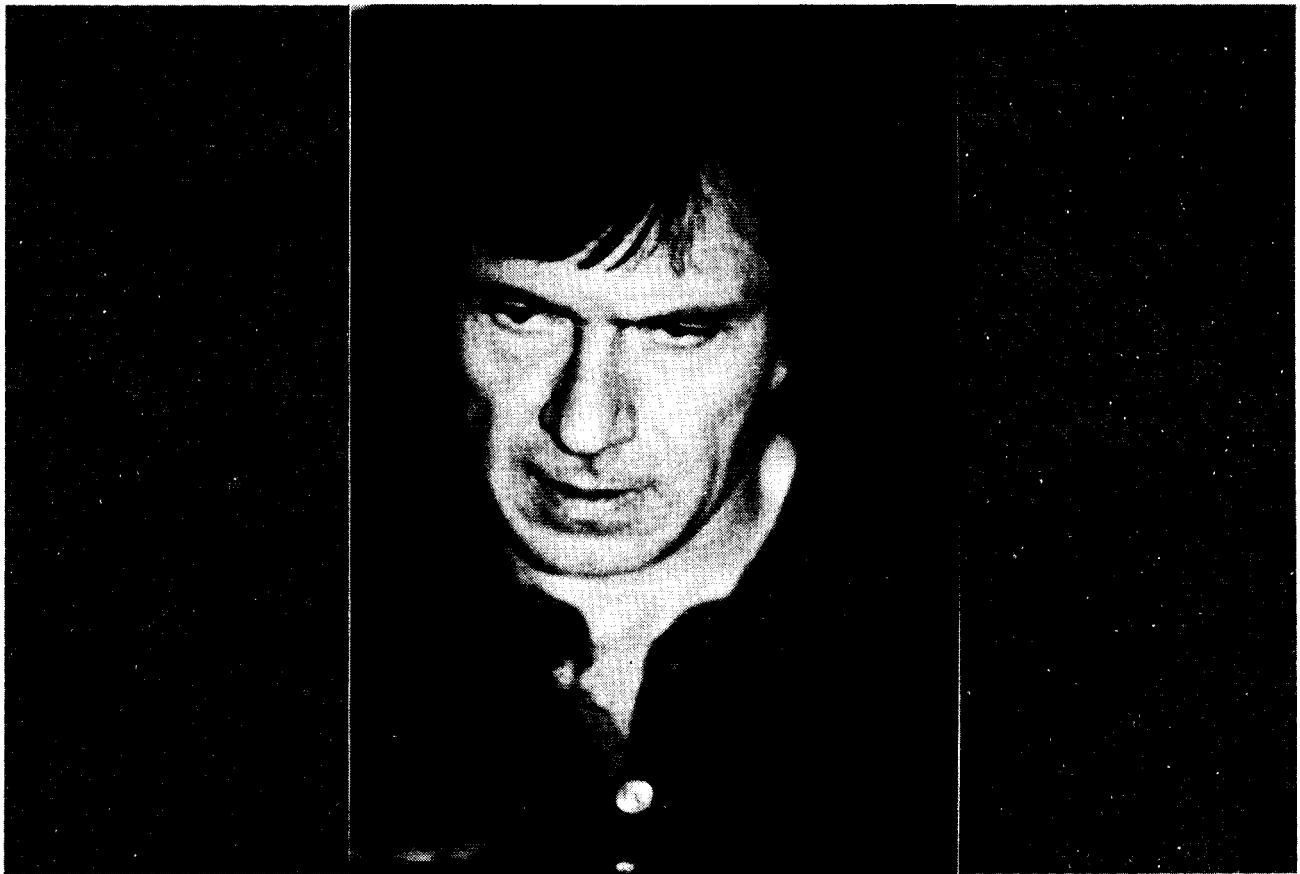
●クロスオーバーに特徴的なコード

①IIIm7(onV)、IV(onV)……

これはほとんど全部の曲に出てくる。sus4と同じことなのだが、コード・サウンドの広がりを意図するためにはsus4の表記は若干問題がある。なぜなら、sus4と表記すると、どうしてもトニック(I)音を下の方へ「潜らせ」

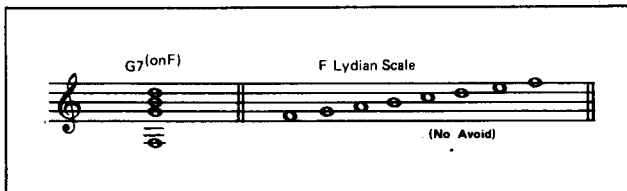
やすいし、コードの5thと長2度でくっつけて弾いてしまいがちだからだ。

<p>トップ・ノートにトニックがくるポジションは、コード・サウンドが豊かに広がって美しい。</p>	<p>トニックのC音を「潜らせ」たり、5thのD音と長2度でくっつけたりしやすい。</p>
---	---



●3rdインヴァージョン(第3転回型)…………

「キャプテン・カリブ」のサビに典型的な例が見られるが、他の曲にもちらほらと出てくる。スケールとしては、リディアンをあてはめる。



●スケールについて

本書では、フィル・インやアド・リブのためのアイデアとして、「アヴェイラブル・ノート・スケール」を分析して載せておいた。「アヴェイラブル・ノート・スケール」については、アド・リブのための「アイデア」にすぎないので、あまり深刻に考えこまない方がよい。要するに、どの音を使えば「効果的だろうか……」ということな

のだ。

クロスオーバーの場合、あまりオルタード・テンションを使わないようだ。ナチュラル・テンションというか、ダイアトニックなというか、サウンド的に「すっきり広がる」感じを意図するからだと思う。傾向としては、ドリアンとかエオリアン、そしてリディアンがひんぱんに使われ、デイブ・グルーシンの場合には、ペントニックですっきりまとめてしまったところも結構多い。

●リズム・バックイング

キーボードのリズム・バックイングによいお手本となる曲が多い。そのつど演奏解説に書いておいたが、「右手と左手のコンビネーション(Rag-Bag)」とか、ハンマリングのような弾き方(Rondo)……など、コード・ワークの面からも、リズムの面からも、それぞれのコピー譜と解説をよく読んで勉強して欲しい。有益な部分が多いと思う。

◆本書で使用したレコード◆

マウンテン・ダンス

MOUNTAIN DANCE

DAVE GRUSIN



= Side A =

- RAG-BAG by Dave Grusin
- FRIENDS AND STRANGERS by William Jeffery
- CITYNIGHTS by Dave Grusin
- RONDO... "IF YOU HOLD OUT YOUR HAND"
by Dave Grusin

= Side B =

- MOUNTAIN DANCE by Dave Grusin
- THANKSONG by Dave Grusin
- CAPTAIN CARIBÉ by Dave Grusin
- EITHER WAY by Harvey Mason

MOUNTAIN DANCE

ビクター音楽産業株式会社
VIJ-6326 / ¥2,500

MUSICIANS

DAVE GRUSIN:

Acoustic and E. Piano, Synthesizer
(SHINWAY/FENDER RHODES/MINIMOOG)

HARVEY MASON: Drums

MARCUS MILLER: Bass

JEFF MIRONOV: Guitar

IAN UNDERWOOD: Synthesizers (OBX/PROPHET 5)

EDWARD WALSH: Synthesizer (OBERHEIM)

RUBENS BASSIN: Percussions

*デイブ・グルーシンのリーダー・アルバムは、この「マウンテン・ダンス」で2枚目になるが、1枚目のリーダー・アルバム「ジェントル・サウンド」は廃盤になっている。

★デイブ・グルーシンが参加しているレコードは数多くあるが、ここに、代表的なレコードを紹介しておきます。

- | | |
|--|---|
| 「リー・リトナー キャプテン・フィンガーズ」(CBSソニー 25AP-577) | 「渡辺貞夫 カリフォルニア・ジャワー」(ビクター VIJ-6012) |
| 「リー・リトナー & ジェントル・ソウツ ジェントル・ソウツ」(ビクター VIDC-1) | 「渡辺貞夫 モーニング・アイランド」(ビクター VIJ-6018) |
| 「リー・リトナー & ジェントル・ソウツ フレンドシップ」(ビクター VIDC-3) | 「渡辺貞夫 マイ・ディア・ライフ」(ビクター VIJ-6001) |
| 「リー・リトナー キャプテンズ・ジャーニー」(ワーナー・バイオニア P-10562E) | 「アール・クルー リビング・インサイド・ユア・ラブ」
(キング GP-3124) |
| 「リー・リトナー / 暗闇へとびだせ」(ワーナー・バイオニア P-10645E) | 「アール・クルー アール・クルー」(キング GP-3123) |
| 「リー・リトナー リー・リトナー・イン・リオ」(ビクター VIJ-6312) | 「アール・クルー フィンガー・ヘインディング」
(キング GP-3120) |
| 「リー・リトナー ファースト・コース」(CBSソニー 25AP-56) | |

RAG-BAG

ラグ・バッグ



by Dave Grusin



Playing Advice ● プレイング・アドバイス

★

左手と右手のコンビネーションを使ったリズム・パターンが印象的だ。資料(輸入された譜面)のニュアンスや、**㊦**の部分をよく聴いた感じでは、右手で大半を弾いているのかもしれない(Ex.1参照)。

(Ex.1) 輸入された資料の冒頭

現実に我々が演奏する場合には、手の大きさのことも考慮して、左手をもう少し使った方が良く思う。記譜に際して、どのように表現するか迷ったのだが、左手をある程度使った方のパターンに統一した。そのために、レコードとは若干違った感じのところもある(Ex.2参照)。

(Ex.2)

㊦~**㊩**、**㊪**~**㊭**は、ユニゾンで演奏されるが、少しはずんだ感じになる。 $\text{♪} = \text{♪}$ の表示に注意して欲しい。記譜と実際の両方について、少しサンプルを示しておこう(Ex.3参照)。

(Ex.3)

㊦のギター・ソロのバックイングは、「広がりのあるコード・サウンド」を心がけよう。4小節のパターンを4回演奏するので、都合16小節だ。各パターンの4小節目の1~3拍にはリズムの「キメ」がある(Ex.4参照)。

(Ex.4)

㊦の13小節目に、トライアドの平行コードがあるが、これは、Cのブルー・ノートを意識したものだ。E^bmのコード・トーン、E^b音、G^b音、B^b音は、それぞれ、Cのブルー・ノート(E^b音はb3、G^b音はb5、B^b音はb7つまりセブンス)になる(Ex.5参照)。

(Ex.5)

C Blues Scale

E^bmのトライアドとなる

RAG-BAG

●ラグ・バッグ/by Dave Grusin

The musical score is written for piano and bass in a 4/4 time signature. It consists of five systems of music. The first system is labeled 'A' and features a Cm7 chord. The second system is divided into two parts, '1.' and '2.', with a 'B' section and a Cm7 chord. The third system features an AΔ7 chord. The fourth system features Cm7 and AΔ7 chords. The fifth system is labeled 'Drums Fit in' and includes a 3-measure rest in the bass line. The score includes various musical notations such as eighth notes, quarter notes, and chords, along with dynamic markings like accents (^) and slurs.

Copyright © 1980 by Roaring Fork Music
Rights for Japan assigned to Victor Music Publishing Co., Inc.

C (N.C.) → (♩-♩[♯]) →

(♩-♩[♯]) → Cm

A♭7 Gm7 Fm7 Fm7(onB♭) Cm E♭7 A♭7 Gm7 Fm7

Gm7 A♭7 Fm7(onB♭) Cm7 A♭7

(♩-♩[♯]) → Cm7 + Synth.

A♭7 Gm7 Fm7 Fm7(onB♭) Cm7 E♭m7 A♭7 E♭(onG) Fm7

8va → 8va →

Fm7 (on B \flat) E \flat 9 A Δ 7 (8va) F (on D \flat)

Am7 Dm7 Gm7 Em7 Am7 Dm7 B \flat m7 (on E \flat) Gm7 (on C) Gm7 (on B \flat)

Am7 Dm7 Gm7 Em7 C \sharp m7 F \sharp m7 Dm7 (on G)

Em7 (on A) F \sharp m7 (on B) F Cm7

A Δ 7

Em7 Am7 Dm7 B^bm7(onE^b) Gm7(onC) Gm7(onB^b) Am7 Dm7 Gm7

Em7 C[#]m7 F[#]m7 Dm7(onG) Em7(onA) F[#]m7(onB)

Cm7 J

A^bΔ7 Cm7

A^bΔ7 Cm7 K Dr. Fill in

$A\Delta 7$ (♩=♩♩) →
L Cm

$A\Delta 7$ $Gm7$ $Fm7$ $Fm7(onB^b)$ Cm $E^b 7$ $A\Delta 7$ $Gm7$ $Fm7$ $Gm7$ $A\Delta 7$ $Fm7(onB^b)$ $Cm7$

$Cm7$ $A\Delta 7$

M $+ Synth.$ $Cm7$ (♩=♩♩) →
 $A\Delta 7$ $Gm7$ $Fm7$ $Fm7(onB^b)$ $Cm7$ $E^b m7$ $A\Delta 7$ $E^b(onG)$ $Fm7$ $Fm7(onB^b)$ $E^b 9$ $A\Delta 7$ $F(onD^b)$

CITY NIGHTS

シティ・ナイツ



by Dave Grusin



Playing Advice ● プレイング・アドバイス

③～④のピアノのリズム・パターンは、クロスオーバー・ミュージック特有のものだ。このようなパターンでは、右手にトライアドを意識する方法がある。たとえば、F#m7については、左手のルート(F#音)を切り離して考えると、3rd-5th-7th(A音-C#音-E音)がメジャー・トライアド「A」となる。さらに、11th-6th-ルート(B音-D#音-F#音)の組みあわせによる平行コード「B」を考えることもできる(Ex.1参照)。

(Ex.1)

Ex.1 shows piano triads and chord voicings for F#m7 and C#m7. The first system shows F#m7 with triads A (3rd-5th-7th) and B (11th-6th-root). The second system shows C#m7 with triads E (3rd-5th-7th) and B (11th-6th-root). Labels include 'トライアドA', 'トライアドB', 'トライアドE', and 'ルート' (root).

F#m7とC#m7による部分(③～④、⑤、⑧～⑩)を「暗」とすれば、サンバ風の軽快な部分(④、⑥)が「明」ということになると思う。このふたつのイメージを交互に演奏するのだが、⑤～⑥、そしてコーダ部の⑧～⑩では、素晴らしいアコースティック・ピアノのソロが展

開される。全く「ムダのない」というか、「スキのない」というか、計算しつくされた感じさえするようなアド・リブだ。特に⑥のソロは圧巻!という感じだ。アイデアをいくつか分析しておこう(Ex.2参照)。

(Ex.2)

⑥の3小節目は、C#m7の9th、11thをうまく使っていることに注目。

Ex.2 shows C#m7 chords with 9th and 11th extensions. The first system shows a melodic line with C#m7, 9th, and 11th. The second system shows a chord voicing for C#m7 with 9th and 11th.

たったこれだけの組みあわせだ

⑥の5～6小節は、同型のフレーズを見ることができる。モチーフ(動機)の展開ということだ。

Ex.2 shows C Lydian Scale and chord voicings. The first system shows a melodic line with C, F#m7, and B7. The second system shows a chord voicing for C Lydian Scale with 9th, #11th, and 6th.

Available Note Scale

●アヴェイラブル・ノート・スケール

☐は、F[#]m7とC[#]m7の2種類のコードでできている。
アヴェイラブル・ノート・スケールは次のようになる。

F[#]m7 F[#] Dorian Scale (Avoid)

C[#]m7 C[#] Aeolian Scale (Avoid)

★☐の1～3小節は次のようになる。

AΔ7 A Lydian Scale (No Avoid)

G[#]m7 G[#] Phrygian Scale (Avoid)

C[#]m7 C[#] Aeolian Scale (Avoid)

★4小節目でCへ転調する。

Dm7 D Dorian Scale (Avoid)

G7 G Mixo-Lydian Scale (Avoid)

C C Lydian Scale (No Avoid)
(#11thを使ってLydian)

6小節目でEへ転調するが、これは、もとの調性(♯が4個)への復帰ということになる。

- F[#]m7……F[#] Dorian Scale
- B7……B Mixo-Lydian Scale
- E……E Ionian Scale

★8小節目は、E^bのMixo-Lydian Scale。

Bm7(onE) E^b7 E^b Mixo-Lydian Scale

E^bm7(onE)の場合の Avoid Note

E^b7の場合の Avoid Note

★9小節目は、DのLydianが想定される。

D D Lydian Scale (No Avoid)

★10～11小節は、もとの調性(♯が4個)への復帰と考えられる。

- C[#]m7……C[#] Aeolian Scale
- F[#]m7……F[#] Dorian Scale

★12小節目からFへ転調する。13小節目のFはIonianでもLydianでもよいが、14小節目へのつながりを考えるとLydianの方がよさそうだ。

Gm7 G Dorian Scale (Avoid)

C7 C Mixo-Lydian Scale (Avoid)

F F Lydian Scale (No Avoid)

★14小節目からAへ転調する。

Bm7(onE) E7 E Mixo-Lydian

Bm7(onE)の場合の Avoid Note

E7の場合の Avoid Note

★15小節目のAΔ7は、トニック・コードなので、A Ionianでも、A Lydianでもよい。

★16小節目のG[#]7sus4は、終結部なので、アヴェイラブル・ノート・スケールを想定することには必要だと思いが、一応、G[#] Mixo-Lydianがよい。

CITY NIGHTS

● シティ・ナイツ/by Dave Grusin

(♩=58)
C#m7
E. Piano

A

F#m7 AΔ7 G#m7

C#m7 F#m7

AΔ7 G#m7 C#m B F#m7 (♩=112) ♩=d

C#m7 F#m7

C#m7 Synth. Solo

Copyright © 1980 by Roaring Fork Music
Rights for Japan assigned to Victor Music Publishing Co., Inc.

First system of piano accompaniment. Chords: F#m7, C#m7. Includes a 'C' time signature and dynamic markings like 'v' and 'iv'.

Second system of piano accompaniment. Chords: F#m7, C#m7. Includes dynamic markings like 'v' and 'iv'.

Third system of piano accompaniment. Chords: F#m7, C#m7. Includes dynamic markings like 'v' and 'iv'.

Fourth system of piano accompaniment. Chords: F#m7, A#7, G#m7, C#m7, B7. Includes a box labeled 'E. Piano' and dynamic markings like 'p'.

Fifth system of piano accompaniment. Chords: A#7, G#m7, C#m7, Dm7(onG), G7(13). Includes a box labeled 'D'.

Sixth system of piano accompaniment. Chords: C(9), F#m7(onB), B7(13), E(9), Bbm7(9)(onE), Eb7(9). Includes dynamic markings like 'p'.

D Δ 7 *8va* C \sharp m7 F \sharp m7 Gm7 C7

F(6) Bm7(onE) E7(13) A Δ 7(9) G \sharp 7sus4 synth.

E Acc. Piano F \sharp m7 C \sharp m7

F \sharp m7 C \sharp m7

F \sharp m7 C \sharp m7

F \sharp m7 C \sharp m7 B \flat 7(+13)

AΔ7 G[#]m7 C[#]m7 Dm7 G7(13)
 C6(9) F[#]m7 B7(13) E6(9) B^bm7(onE^b)
 — *soa* → E^b7(9) D6(9) C[#]m7
 F[#]m7 — (soa) → Gm7 C7 F6(9)
 Bm7(onE) E7(13) AΔ7 G[#]7sus4
 Coda C[#]m7 G F[#]m7 *D.S.*

C#m7

F#m7 C#m7

(sua) →

(sua) → F#m7 C#m7

F#m7

C#m7 G Col. C

Col. C

F.O.

RONDO.... If You Hold Out Your Hand

ロンド...イフ・ユー・ホールド・アウト・ユア・ハンド



by Dave Grusin



Playing Advice ● プレイング・アドバイス

「ロンド」とは、多くの踊り手が輪をえがいて踊ることや、そのための舞曲(輪舞曲)という意味のフランス語だ。この場合、曲の構成から見ると、「ロンド型式」のようにも考えられる。

Ⅰ~Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ~Ⅷの部分は、Gのペンタトニックで書かれ、4小節単位のパターンにのせて展開される。

ペンタトニックとは、五音音階のことで、メジャー・スケールのⅣ音とⅦ音を除いたところの、Ⅰ音とⅡ音とⅢ音とⅤ音とⅥ音の組み合わせによる音の組織といえることができる。

ペンタトニックをそれぞれのコードについて考えてみることも有意義だと思う。それぞれのコード(G→Am7→Am7(onD)→Em→G→Am7→Am7(onD)→G)について、どの構成音に相当するかを分析しておいたので参考にして欲しい(Ex.1参照)。

(Ex.1)

●メロディー・ライン

●Gのメジャー・スケールからⅣ音とⅦ音を除くと

●Gのペンタトニックとなる。

●使用されたコードに関連させると

ⅤとⅥの部分では、エレクトリック・ピアノのバックキングに注目しよう。ギターやベースにおけるハンマリング・オンのような弾き方が随所に見られるはずだ。

右手で弾く場合には、もうひとつ音を重ね、5(小)指をささえに利用しながら、2(人差)指と3(中)指で演奏する(Ex.2参照)。

(Ex.2)

左手で弾く場合には2(人差)指と1(親)指というケースが多いと思うが、リー・リトナーの『ジェントル・ソウツ』に収録されている「キャプテン・カリブ」のイントロにおけるグルーシンのプレイが格好の例だ(Ex.3参照)。

使うべき音の選択は次のようになる。Emでは、9thと3rd(F#音とG音)、11thと5th(A音とB音)、7thとルート(D音とE音)などの使い方。Am7では、9thと3rd(B音とC音)、11thと5th(D音とE音)、7thとルート(G音とA音)などの使い方。

Ⅴの部分では、スチール・ドラムに似せたシンセサイザーを聴くことができる。次のⅥの部分へかけて、「カリブ海風」のサウンド

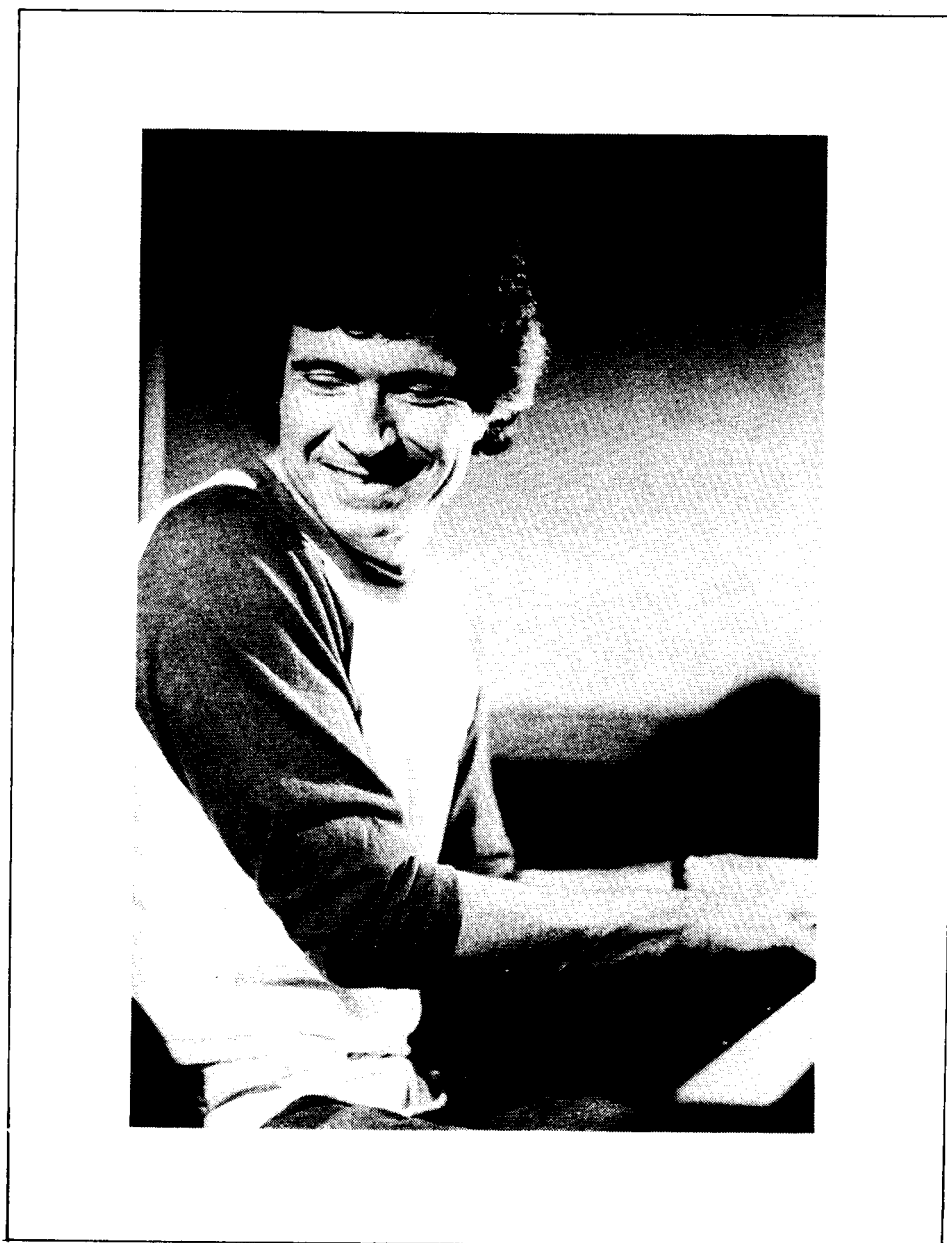
が展開されるのだが、渡辺貞夫の「カリフォルニア・シャワー」などで、すでにおなじみ「グルーシン・サウンド」という感じだ。そういえば、「キャプテン・カリブ」という題名にも彼のカリブ海サウンドへの志向が感じられる。

Ⅳでは、トライアドを利用したソロと、Emのコードを意識したソロが、ベースとかけあい(このようなかけあいをバトルという)で演奏される。

◇

◇

ⅤとⅥの部分は、Gメジャーの平行短調であるEマイナーだが、この部分もペントニックが使われている。音の組みあわせだけに注目してみると、Gのペントニックと同じことになっているのに注意して欲しい。Emのコードについて考えると、ルート(E音)、3rd(G音)、11th(A音)、5th(B音)、7th(D音)という組みあわせになるが、先のと対照させてみよう。



RONDO....

If You Hold Out Your Hand

● ロンド...イフ・ユー・ホールド・アウト・ユア・ハンド/by Dave Grusin

Chord progression for the first system: G Am7 Am7(onD) Em7 G(onB) C G(onB) Am7 Am7(onD) G

Chord progression for the second system: G Am7 Am7(onD) Em7 G(onB) C Gm(onB) A7 D7 G Synth. Bass

Chord progression for the third system: G Am7 Am7(onD) Em7 G Am7(onG) Am7(onD) G

Copyright © 1980 by Roaring Fork Music
Rights for Japan assigned to Victor Music Publishing Co., Inc.

G Am7 Am7(onD) Em G(onB) C C(onG) G

This system contains the first two staves of music. The bass staff features a melodic line with eighth notes and quarter notes, accompanied by chord labels: G, Am7, Am7(onD), Em, G(onB), C, C(onG), and G. The piano part consists of a treble and bass staff with chords and moving lines.

C G Am7 Am7(onD) Em G Am7 Am7(onD) G

This system contains the second two staves of music. The bass staff continues the melodic line with chord labels: C, G, Am7, Am7(onD), Em, G, Am7, Am7(onD), and G. A box labeled 'C' is placed above the first measure. The piano part continues with chords and moving lines.

G Am7 Am7(onD) Em7 G Am7 Am7(onD) G *Guit. Muted*

This system contains the third two staves of music. The bass staff has chord labels: G, Am7, Am7(onD), Em7, G, Am7, Am7(onD), and G. A box labeled 'C' is placed above the first measure. The piano part includes a section with a double bar line and a slash, indicating a repeat or a specific performance instruction. A box labeled 'Guit. Muted' is placed above the final measure of the bass staff.

D G Am7 Am7(onD) Em G Am7 Am7(onD) G

This system contains the final two staves of music. The bass staff has chord labels: D, G, Am7, Am7(onD), Em, G, Am7, Am7(onD), and G. A box labeled 'D' is placed above the first measure. The piano part concludes with chords and moving lines.

G Am7 Am7(onD) Em7 G Am7 Am7(onD) G Synth.

The first system of the musical score consists of three staves. The top staff is a bass line with a treble clef, showing a sequence of chords: G, Am7, Am7(onD), Em7, G, Am7, Am7(onD), and G. A 'Synth.' box is placed above the final G chord. The middle staff is a treble clef staff with a piano accompaniment. The bottom staff is a bass clef staff with a piano accompaniment.

E Em7 Am7 Bm7

The second system of the musical score consists of three staves. The top staff is a treble clef staff with a piano accompaniment. The middle staff is a treble clef staff with a piano accompaniment. The bottom staff is a bass clef staff with a piano accompaniment. Chords are indicated above the top staff: E, Em7, Am7, and Bm7.

Em7 Am7 Am7 Bm7 C C#m7(-5) D7

The third system of the musical score consists of three staves. The top staff is a treble clef staff with a piano accompaniment. The middle staff is a treble clef staff with a piano accompaniment. The bottom staff is a bass clef staff with a piano accompaniment. Chords are indicated above the top staff: Em7, Am7, Am7, Bm7, C, C#m7(-5), and D7.

F G Am7 Am7(onD) Em7 G Am7 Am7(onD) G

The fourth system of the musical score consists of three staves. The top staff is a treble clef staff with a piano accompaniment. The middle staff is a treble clef staff with a piano accompaniment. The bottom staff is a bass clef staff with a piano accompaniment. Chords are indicated above the top staff: F, G, Am7, Am7(onD), Em7, G, Am7, Am7(onD), and G.

G Am7 Am7(onD) Em7 G Am7 Am7(onD) G synth.

The first system of music features a guitar chord line at the top with the following sequence: G, Am7, Am7(onD), Em7, G, Am7, Am7(onD), and G. Below this, the piano accompaniment is written in G major, 4/4 time. The right hand plays a melodic line with eighth and sixteenth notes, while the left hand provides a harmonic accompaniment with chords and single notes. A 'synth.' marking is present above the final measure of the system.

G

The second system begins with a boxed 'G' chord marking above the first measure of the guitar line. The piano accompaniment continues with a similar melodic and harmonic structure to the first system, maintaining the 4/4 time signature and G major key.

The third system continues the piano accompaniment. The right hand features a more active melodic line with frequent sixteenth-note patterns, while the left hand maintains a steady harmonic accompaniment with chords and moving bass lines.

H

The fourth system starts with a boxed 'H' chord marking above the first measure of the guitar line. The piano accompaniment concludes with a final melodic phrase in the right hand and a sustained chord in the left hand, ending the piece.

I Em7 Am7 Bm7

Em7 Am7 Am7 Bm7 C C#m7(-5) D7

Am7 Bm7 C C#m7(-5) D7 Am7 Bm7 C C#m7(-5) D7 Am7 Guitar Muted

J

Synth. Bass

K G Am7 Am7(onD) Em7 G Am7(onG)

Am7(onD) G G Am7 Am7(onD) Em7

MOUNTAIN DANCE

マウンテン・ダンス



by Dave Grusin



Playing Advice ● プレイング・アドバイス

いかにもヨーロッパ的な「舞曲」という感じだ。そして、この曲の特徴は、特有のベース・ラインにある。

まず、Aの5小節めからCの2小節までと、Cの5小節めからEの2小節まで、そして、Iの5小節めからNの2小節までを見て欲しい。このように、同じ音を演奏し続けるような(つまり通奏低音のような)ベース・ラインのことを、「ペダル・ポイント(あるいはただ単にペダル)」という。

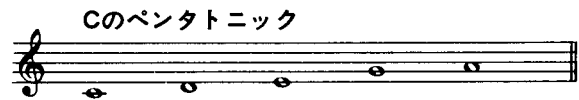
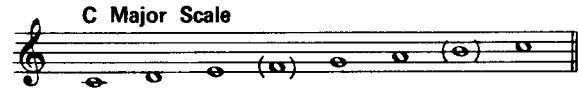
つづいて、Gの4小節前(Fの17小節め)からはじまり、G、H、Iと続く4小節単位のパターンのように、ベースが一定の音型をくりかえすものを、「バツ・オスティナート」という(Ex.1参照)。

(Ex.1)



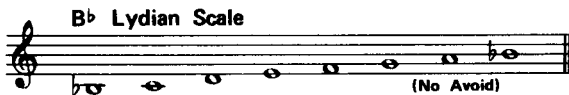
Cのアイオニアンでよいのだが、VII音(つまりB音)をなるべく避け、IV音(F音)はIII音(E音)の「隣音」なり、III音(E音)とV音(G音)の「経過音」と考えればよいだろう(Ex.2参照)。

(Ex.2)



Available Note Scale ● アヴェイラブル・ノート・スケール

★EとOでは、B^bのリディアン・スケールを使う。



★G、H、Iで展開されるアド・リブは、スケールというよりも、Cメジャーという調性の範囲内(守調的な)での、つまり、ダイアトニックなソロということになる。基本となる考え方は、Cのペントトニックなり、

MOUNTAIN DANCE

● マウンテン・ダンス / by Dave Grusin

Copyright © 1980 by Roaring Fork Music
Rights for Japan assigned to Victor Music Publishing Co., Inc.

D F(onC) C CΔ7 F(onC) C D7(onC)
 C C G(onC) E F(onC) C C7(onF)
 F C(onG) G# dimAm Dm7 G7 C Am7 B^b7 F Synth.
 G C Am7 B^b7 3-8va
 G C Am7 B^b7 8va
 G C Am7 B^b7

First system of musical notation. The treble clef staff contains a complex melodic line with many sixteenth and thirty-second notes. The bass clef staff contains a rhythmic accompaniment. A box labeled "Bass" is positioned above the bass staff in the second measure.

Second system of musical notation. The treble clef staff has a rest in the first measure, followed by a melodic line starting in the second measure. A box labeled "G" is positioned above the treble staff in the second measure. The bass clef staff continues with a rhythmic accompaniment.

Third system of musical notation. The treble clef staff has a melodic line with a triplet of eighth notes in the first measure. The bass clef staff has a rhythmic accompaniment. A box labeled "Bass Simile 4 Bars Pattern" is positioned above the bass staff in the second measure, with a long arrow pointing to the right.

Fourth system of musical notation. The treble clef staff has a melodic line with a triplet of eighth notes in the first measure. The bass clef staff has a rhythmic accompaniment.

Fifth system of musical notation. The treble clef staff has a melodic line with a triplet of eighth notes in the first measure. The bass clef staff has a rhythmic accompaniment.

Sixth system of musical notation. The treble clef staff has a melodic line with a triplet of eighth notes in the first measure. A box labeled "H" is positioned above the treble staff in the second measure. The bass clef staff has a rhythmic accompaniment.

First system of musical notation, consisting of a grand staff with a treble clef on the upper staff and a bass clef on the lower staff. The music features a complex melodic line in the treble clef with many sixteenth and thirty-second notes, and a more rhythmic accompaniment in the bass clef.

Second system of musical notation, continuing the piece with similar melodic and rhythmic patterns in both staves.

Third system of musical notation, showing further development of the musical themes.

Fourth system of musical notation, featuring a dense melodic texture in the treble clef. A fermata is placed over a measure in the treble clef, and a '3' indicates a triplet in the bass clef.

Fifth system of musical notation, marked with 'Synth. Adlib' above the treble clef and 'Piano Solo' above the bass clef. The treble clef contains a complex melodic line with many sixteenth notes, while the bass clef provides a steady accompaniment.

Sixth system of musical notation, marked with 'Simile Backing' above the treble clef and 'Piano' above the bass clef. The treble clef continues with a complex melodic line, and the bass clef provides a steady accompaniment.

First system of musical notation, consisting of a treble and bass clef staff. The treble staff contains a complex melodic line with many sixteenth and thirty-second notes, including slurs and ties. The bass staff contains a few notes, including a half note and a quarter note.

Second system of musical notation. The treble staff continues the melodic line with a triplet of eighth notes marked with a '3'. The bass staff has a few notes, including a half note and a quarter note.

Third system of musical notation. The treble staff features a triplet of eighth notes marked with a '3'. The bass staff has a few notes, including a half note and a quarter note.

Fourth system of musical notation. The treble staff has a triplet of eighth notes marked with a '3'. The bass staff has a few notes, including a half note and a quarter note.

Fifth system of musical notation. The treble staff continues the melodic line with many sixteenth and thirty-second notes. The bass staff has a few notes, including a half note and a quarter note.

Sixth system of musical notation. The treble staff has a triplet of eighth notes marked with a '3'. The bass staff has a few notes, including a half note and a quarter note.

First system of musical notation, featuring a treble and bass clef with various rhythmic patterns and accidentals.

Second system of musical notation, including a piano section with a "J" box and a series of chords: F, C (onG), G#dim, Am, Dm7, G, C, Am7, Bb7.

Third system of musical notation, featuring a piano section with a "K" box and a section labeled "(Triangle)" with rhythmic notation.

Fourth system of musical notation, including a section labeled "(Synth.)" and a "Sua" annotation.

Fifth system of musical notation, featuring a piano section with a "L" box and a section with a slash symbol.

Sixth system of musical notation, featuring a piano section with a slash symbol and a final melodic phrase.

M

N F(onC) C C7(onF) F C(onG) dimAmDm7

G7 C Am Bb7 O

G C Am Bb7

G C Am Bb7 (8ua)

G C Am Bb7

The image shows a musical score for piano, consisting of three systems of staves. Each system has a grand staff (treble and bass clefs) and a single bass clef staff below it. The first system includes a circled measure with the number '800' above it and a 'Synth.' marking. The second system continues the melodic and harmonic development. The third system features the instruction 'Simile' written above the treble staff and below the bass staff, indicating a similar texture to the previous system. The score concludes with the marking 'F.0' at the bottom right.

THANKSONG

サンクソング



by Dave Grusin



Playing Advice ● プレイング・アドバイス

美しいアコースティック・ピアノのソロ。アコースティック・ピアノのソロといえば、キース・ジャレットやチック・コリアのソロと比較したくなるのが人情(?)だと思うのだが、デイブ・グルーシンのソロは、いわゆる「クラシック・ピアノ」のようなサウンドで、ある種の「落ち着き」を感じるのだ。この「落ち着き」という表現がうまく僕の真意を伝えられるか若干不安だが、フランス印象派というか、ラヴェルやドビッシーのピアノ作品を聴いているような感じがするのだがどうだろうか。



さて、アルペジオ(分散和音)の積み重ね方を見ていると、11thをうまく使っているのに気付くと思う。ほんのささいなニュアンスだが、コード・サウンドに微妙な色あいを添えている。Em7(曲のちょうどまん中でrit.のついたところ)のコードでは、ルート(E音)-5th(B音)-9th(F#音)-3rd(G音)-11th(A音)-7th(D音)……ということになる。

高音域でのきらめくフィル・インも注意して見ておくと良いと思う。



THANKSONG

● サングソング/by Dave Grusin

Slow Rubato (N.C.)

The musical score is written for piano and guitar. It consists of four systems of music, each with a treble and bass clef staff. The key signature is one sharp (F#) and the time signature is 4/4. The tempo and style are indicated as 'Slow Rubato (N.C.)'. The score includes various chords and articulations:

- System 1: Treble clef has a melodic line with slurs and accents. Bass clef has chords: D(onG), C(onG), and Am7.
- System 2: Treble clef has a melodic line. Bass clef has chords: G, D(onG), C(onG), and G.
- System 3: Treble clef has a melodic line. Bass clef has chords: Am7(11), Bm7, and Em7(11).
- System 4: Treble clef has a melodic line. Bass clef has chords: Am7, Bm7, C(9), Am7(onD), and G(9).

Articulations include slurs, accents, and a 'p' (piano) marking at the end of the piece.

Copyright © 1980 by Roaring Fork Music
Rights for Japan assigned to Victor Music Publishing Co., Inc.

C Δ 7 Bm7 Am7(11) Bm7
 Em7(9) G
 rit.
 C D7 G G
 rit.
 C(9) D7 Em7(11) 8va
 rit.
 Am7 Bm7 C Am7(onD) G(9) 8va
 C Δ 7 Bm7 8va

The image displays three systems of musical notation for piano. Each system consists of two staves, one for the treble clef and one for the bass clef. The first system shows a sequence of chords and notes. The second system includes guitar-like fingering (Gua) and chord symbols (G, Bbd) above the notes. The third system includes guitar-like fingering (Gua) and chord symbols (G, Am7(11), Em7(11)) above the notes. The notation includes treble and bass clefs, notes, rests, and various musical symbols.



CAPTAIN CARIBÉ

キャプテン・カリブ



by Dave Grusin



Playing Advice ● プレイイング・アドバイス

クロスオーバー・ミュージックの象徴的ヒット曲だ。アール・クルーやリー・リトナーで大ヒットした曲だが、今回の編曲(これこそオリジナルの編曲ということかな)では、「サビ」の部分からスタートしている。実は、僕のグループでは前々からこの方法(サビからのスタート)で演奏していたので、すっかりうれしくなってしまった(手前味噌の程は御容赦下さい)。

◇ ◇
 ㊦の部分でのピアノのフィル・インのアイデアを分析しておこう。同様の分析は、拙著「キーボード・コード・ワーク(リットー・ミュージック刊行)」の54ページにも書いたのだが、「リディアン」や「リディアン・セブンス」を利用するのだ。

$Bb_9^{(onAb)}$ のところでは、 Bb のペンタトニックでフィル・インしたりしているが、 Ab のリディアンも使えるし、 Bb のリディアン・セブンスを Ab 音からスタートさせて考えたスケールも使うことができる。 $F_7^{(onEb)}$ や $Gb_{\Delta 7}^{(b5)}$ や $D_7^{(onC)}$ では、それぞれベース・ノートのリディアン・スケールを利用するとよい。リディアン系のスケールにはアヴォイド・ノートがないのが特色だ(Ex.1参照)。

(Ex.1)

$Bb^{(onAb)}$ Bb Lydian 7th Scaleを Aからスタートさせる
 Bb のペンタトニック

(No Avoid)

Ab Lydian Scale

(No Avoid)

$F_7^{(onEb)}$ Eb Lydian Scale

(No Avoid)

$Gb_{\Delta 7}^{(b5)}$(b5)は(#11)と考えた方がよい。

Gb Lydian Scale

(No Avoid)

$D_7^{(onC)}$ C Lydian Scale

(No Avoid)

テーマのメロディー(㊦から㊦)のバックキングでは、マイナー・セブンス・コードを半音ずらして演奏している。マイナー・セブンス・コードの「クロマチック・アプローチ」ということになる(Ex.2参照)。

(Ex.2)

Dm_7 $(C\#m_7)$ Gm_7 $(F\#m_7)$

Available Note Scale ● アヴェイラブル・ノート・スケール

★シンセサイザーのソロ(㊦から㊦の部分)について分析しておこう。

$Cm_7^{(onF)}$ については、Fのブルース・スケールが一番利用されている。部分的には、Fのミクソ・リディアンも使われている。

F Blues Scale

9th (Avoid)

F Mixo-Lydian Scale

(Avoid)

★ Dm_7 については、Dのドリアンが考えられるが、Dのエオリアンも見られる。

D Dorian Scale

(Avoid)

D Aeolian Scale

(Avoid)

★ $Fm_7^{(onBb)}$ では Bb のペンタトニックが使われている。

Bb のペンタトニック

★ $Gm_7^{(onC)}$ では、A音とC音とD音しか使われていないが、 $Gm_7^{(onC)}$ は C_7sus4 と考えられるので、使う音の範囲は次のようなペンタトニックとなる(先の Bb のペンタトニックと同じ組みあわせだ)。

CAPTAIN CARIBÉ

●キャプテン・カリブ/by Dave Grusin

The musical score is arranged in four systems, each with a grand staff (treble and bass clefs). The key signature is B-flat major (two flats) and the time signature is 4/4. The score includes the following elements:

- System 1:** Treble clef starts with a boxed 'A'. Chords: B Δ 7, Am7, B \flat (9)(onA \flat). Annotations: 'Synth. Guit.', 'Poly Synth.', 'Grusin', and 'Su Δ '.
- System 2:** Treble clef continues with chords: F Δ 7(9), Em7, F7(13)(onE \flat). Annotations: 'Grusin', 'Su Δ ', and '(Su Δ)'.
- System 3:** Treble clef continues with chords: B Δ 7, Am7, B \flat (onA \flat), G Δ 7(-5). Annotations: 'Grusin', 'Su Δ '.
- System 4:** Treble clef continues with chords: F7(13)(onE \flat), Dm7, E \flat 7(13)(onD \flat), D7(9)(onC). Annotations: 'Grusin', 'Synth.'.
- System 5:** Treble clef starts with a boxed 'B'. Chords: E \flat m7(onA \flat), Dm7(onG), Fm7(onB \flat), Gm7(onC). Annotations: 'Synth.'.

Copyright © 1976 by Roaring Fork Music
Rights for Japan assigned to Victor Music Publishing Co., Inc.

C Dm7 Solo Gm7 Gm7 (onC) Dm7 Synth.

E. Piano

Dm7 Gm7 Gm7 (onC) Dm7

C Dm7 Gm7 Gm7 (onC) Dm7

Simile

Dm7 *suu* Gm7 Gm7 (onC) Dm7

D B \flat 7 Am7 B \flat (9)(onA \flat) F Δ 7(9) Em7 F7(13)(onE \flat)

Acc. Piano *8va* Poly Synth.

B \flat 7 Am7 B \flat (onA \flat) G Δ 7(-5)

8va Grusin *8va* tr.b

F7(13)(onE \flat) E \flat 7(13)(onD \flat) Dm7 D7(9)(onC) **E** E \flat m7(onA \flat)

Grusin

Dm7(onG) Fm7(onB \flat) Gm7(onC)

Cm7 (onF)
F Synth. Adlib Solo

Simile Fill Backing

Simile Fill Backing

F⁷ Dm7 (onG)

Fm7 (onB^b)

Guitar Adlib Solo

Acc. Piano

G Cm7(onF)

Musical notation for the first system. It features a treble clef staff with a box labeled 'G' and the text 'Cm7(onF)'. Below it is a grand staff with piano accompaniment. The piano part includes a bass line with a 'sua' marking and a treble line with various chords and melodic fragments.

Musical notation for the second system, consisting of two empty grand staves. The word 'Simile' is written in the treble clef staves, indicating that the performer should play as if in the previous system.

G' Dm7(onG)

Musical notation for the third system. It features a treble clef staff with a box labeled 'G'' and the text 'Dm7(onG)'. Below it is a grand staff with piano accompaniment. The piano part includes a bass line with a 'sua' marking and a treble line with various chords and melodic fragments. Chord changes are indicated by 'Fm7(onBb)' and 'Gm7(onC)'.

Musical notation for the fourth system. It features a grand staff with piano accompaniment. The piano part includes a bass line and a treble line with various chords and melodic fragments. A 'Synth. Solo 2X.' marking is present in the treble line, indicating a two-measure solo for a synthesizer.

H (Synth Solo 1x)

H Dm7

8va →

Fm7 (onBb) Gm7 (onC)

Repeat & Fade Out

EITHER WAY

イーザー・ウェイ



by Harvey Mason



Playing Advice ● プレイング・アドバイス

□のアコースティック・ピアノは、クロスオーバー特有のリズムを意識している。つまり、1拍目のとか、4拍目の16分音符によるウラ ということだ (Ex.1参照)。

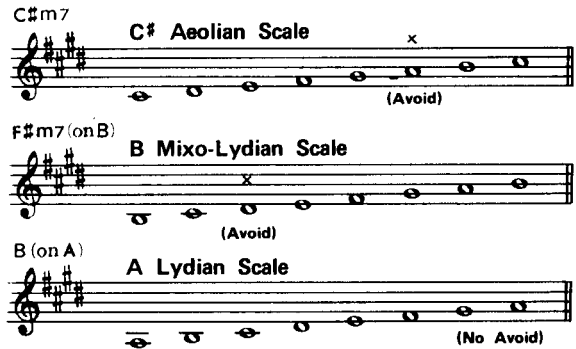
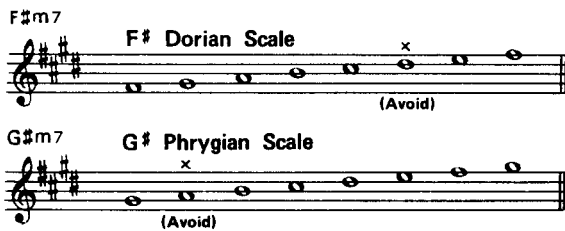
(Ex.1)



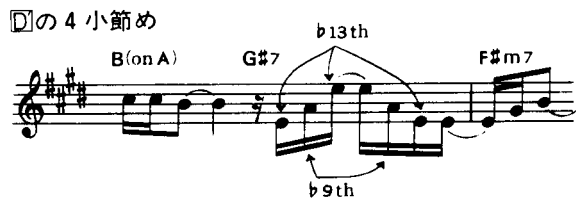
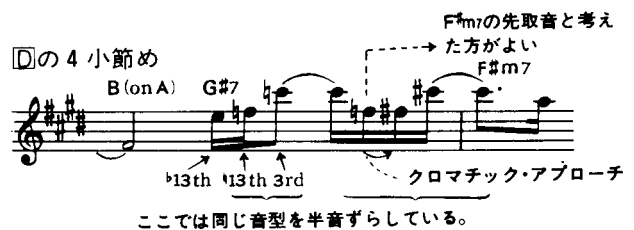
アコースティック・ピアノの右手のオクターブ奏法と、シングル・トーンがうまく配合された曲だ。ソロのアイデアとしては、次のアヴェイラブル・ノート・スケールをよく見て欲しい。

Available Note Scale ● アヴェイラブル・ノート・スケール

★まず、□~□の部分だが、#が4個の調性にもとづいて考えるとよい(キーはC#マイナー)。1~2小節のF#m7→G#m7→C#m7とか、3~4小節のF#m7(onB)→G#m7→B(onA)とか、5~6小節のF#m7→G#m7→C#m7→F#m7(onB)では、ダイアトニックなコード進行なので次のようになる。



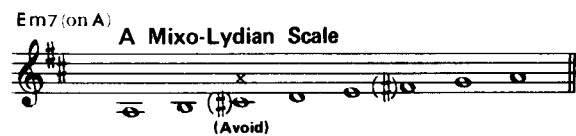
★4小節めのG#7はオルタード・テンションを使用するとよい。スケールの考え方をする必要はないが、一応、オルタード・テンションを分析しておこう。



G# Altered Scale



★7小節めのEm7(onA)は#が2個の調性ということになり、Aのミクソ・リディアンがよい。アヴォイド・ノートは、C#音となる。Em7(onA)はA7sus4とも考えられるからだ。



★ $E^b m7^{(on A^b)}$ は、 b が 5 個、つまり A^b のミクソ・リディアンだ。 $Em7^{(on A)}$ 同様、3rd の C 音がアヴォイド・ノート。

$E^b m7^{(on A^b)}$
 A^b Mixo-Lydian Scale

★ $F^{\#} m7$ に対するダブル・クロマチック・アプローチの $Em7 \rightarrow Fm7 \rightarrow (F^{\#} m7)$ では、それぞれ、ドリアンを想定すると無難だ。

★ E と G では、 b が 5 個 (D^b メジャーとなる) ということになる。

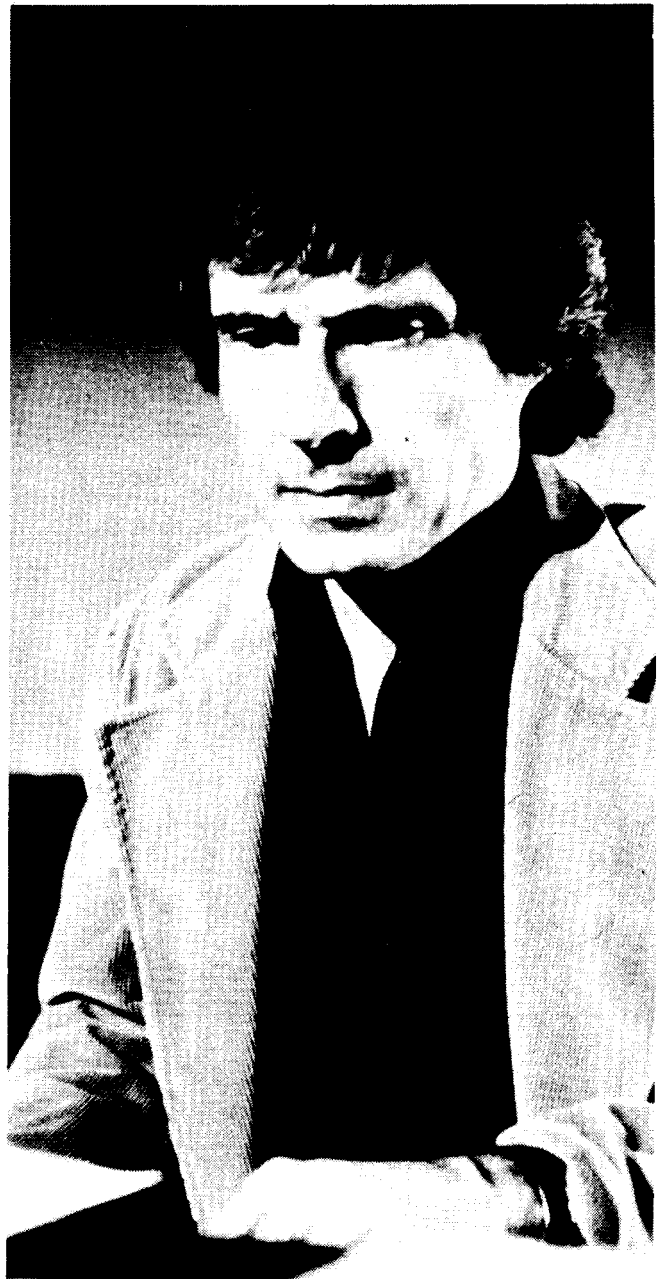
★ $E^b m7^{(on A^b)}$ は先程と同様、C 音をアヴォイド・ノートとするミクソ・リディアンだ。

★ D^b と $B^b m7$ は次のようになる。

D^b
 D^b Ionian Scale

$B^b m7$
 B^b Aeolian Scale

★ G の $F^{\#} m7$ は $F^{\#}$ のドリアン、 $F^{\#} m7^{(on B)}$ は $D^{\#}$ 音をアヴォイド・ノートとするミクソ・リディアンがよい。



EITHER WAY

●イーザー・ウェイ/by Harvey Mason

A $E^b m7$ (onA \flat) $B^b m7$ (9)

Acc. Piano

E. Piano

Guitar Fill →

B $F^\# m7$ $G^\# m7$ $C^\# m7$ $F^\# m7$ (onB) $G^\# m7$ B (onA) $G^\# 7$ (b9)

Acc. pf.

$E^b m7$ $B^b m$ $B^b m$ (9) $E m7$ $F m7$ Synth.

Copyright © by Masong Music
Rights for Japan assigned to Alfa Music., Ltd.

F[#]m7 G[#]m7 C[#]m7 F[#]m9 (onB) E m7 (9)(onA) E^bm7 (9)(onA^b) Em7 Fm7

B F[#]m7 G[#]m7 C[#]m7 F[#]m7 (onB) G[#]m7 B (onA) G[#]7 (-9)

F[#]m7 G[#]m7 C[#]m7 F[#]m7 (onB) Em7 (9)(onA) *dim*

C E^bm7 (9)(onA^b) D^b B^bm7

Acc. P^f.

Detailed description: This is a piano score for a piece in G major. It consists of four systems of music. Each system has a vocal line (treble clef) and a piano accompaniment (grand staff). The first system contains the first two measures, with a triplet in the vocal line. The second system contains measures 3-4, featuring a boxed 'B' section marker. The third system contains measures 5-6, with a 'dim' marking and an 'Acc. P^f' marking. The fourth system contains measures 7-8, with a boxed 'C' section marker and a '900' marking. Chord symbols are placed above the vocal line, and some are enclosed in boxes. The piano accompaniment features a steady eighth-note bass line and chords in the right hand.

$E^b m7 (on A^b)$ D^b $B^b m7$

$E^b m7 (on A^b)$ $E^b m7 (on A^b)$ $Am7$ $Fm7$ $F^{\#} m7$ D $G^{\#} m7$

$C^{\#} m7$ $F^{\#} m7 (9) (on B)$ $G^{\#} m7$ $B (on A)$ $G^{\#} m7 (-9)$

$F^{\#} m7$ $G^{\#} m7$ $C^{\#} m7$ $F^{\#} m7 (on B)$ $Em7 (9) (on A)$

$E^b m7 (9) (on A)$ $Em7$ $Fm7$ $F^{\#} m7$ $G^{\#} m7$ $C^{\#} m7$

D $6aa$

F#m7(9)(onB) G#m7 B(onA) G#7(alt) F#m7 G#m7

C#m7 F#m7(onB) 8va Em7(9)(onA) Ebm7(onAb)

Db Bbm7 Ebm7(onAb)

Db Bbm7

Ebm7(onAb) 8va Am7 Fm7 F#m7 F F#m7 Gm7 (Synth. Unison)

C#m7 F#m7(onB) G#m7 B(onA) G#7(-9) F#m7 G#m7

chord support

C#m7 F#m7(onB) Em7(9)(onA) Ebm7(onAb) Em7 E.Piano Fm7

Coda F#m7 F#m7(onB) 8va Em7(9)(onA) Ebm7(onAb) D.S.

Db Bbm7 Ebm7(onAb)

Db Bbm7 Ebm7(onAb) 8va

Ebm7(onAb) Am7 Fm7 F#m7 F#m7 F#m7(onB)

Bbm7(onAb) Db Bbm7

E^bm7 (on A^b) *8va* *D^b*

B^bm7 *(8va)* *E^bm7 (on A^b)* *Am7 Fm7 F[#]m7*

Col G

Fade Out

CROSSOVER KEYBOARDIST SERIES

Dave Grusin



RittorMusic ¥1,600★